
こいのうた

小空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こいのうた

【Nコード】

N5780D

【作者名】

小空

【あらすじ】

「突発性難聴」医師はそう言っていたらしい。この世界で唯一、好きでいてもいいかな…と思えた音楽。音楽だけが、私を支えていたのに。世界から音が消えた。雰囲気だけでも、と思って大分前から楽しみにしていたライブに出掛けると…聞えないはずの私の耳に、確かに届いたのは…彼の声だった。夢のような、甘くて切ない「こいのうた」の話。

1..全てを失った朝

死にたい、と思った

ある朝、私は目が覚めなかった。

いつもの起床時間を少し過ぎたころ、身体を強く揺さぶられた。そしてやっと目が開いた。

酷い頭痛がしていて、きのう友達と夜遅くまで遊びまわっていた自分にちよつと自己嫌悪した。

目の前には怒ったようなお母さんの顔。

おかしいな、今まで朝帰りしてもほったらかしだったのに。

怒ったお母さんの片手には真っ赤な目覚まし時計。

それは確かにこの部屋の目覚まし時計。

おかしいな、昨日の夜ちゃんとセットしたはずだけだな。

何か、お母さんが言っている。

やけに静かで、まだ脳が起きていないのかな、と思った。

でも、その目覚まし時計は11時を指している。

ああ、もうお昼なのか・・・そろそろ起きなきゃ。

お母さんが目覚まし時計を枕元に置いて何か言っている。

お母さんの口は確かに大きく動いている。

眉間には皺がよっっていて、とても機嫌が悪そうだ。

きつと凄く、怒っている。

凄く怒っているはず、なのに・・・私にお母さんの怒鳴り声が聞えることは無かった。

まるで口パク、お母さんは真剣な顔でパクパクと口を動かしている。

あれ、おかしい。

おかしい。

何も、聞えない。

私は、すぐに目覚まし時計を引っつかんで床に落とした。

何も、音がしない。

お母さんが目を丸くしてこちらを見ていた。

そして、すぐにまたお母さんの口が大きくパクパクと動く。

ゆっくりお母さんを見上げる。

まだ、奇妙な夢の中にいるみたいだった。

2..絶望と静寂

「おか・・・さ、ん」

ゆっくりと口を開いて、今までを思い出しながらお母さんと呼ぶ。一文字一文字、ゆっくりと発していく。

お母さんは呆れたように、私をベットから引きずり下ろした。

そして、私の部屋のドアを指差して何か言う。

どうせ、顔洗ってきなさい、とかそんなことを言っているんだと思った。

(・・・どうしよう・・・！)

私は慌てて自分の机に向かって走り、適当なメモ帳を引きちぎるように破った。

机の上に転がっていたペンを手に取り、その紙に殴るように

「みみがきこえない」

と、書いてお母さんに向けた。

お母さんは目を大きく見開いてその紙を見ていた。

やがて、お母さんは大きく息を吐いた。

私のおでこを軽く小突いて、薄っすら笑いながら何か言う。

信じてない、とすぐにわかった。

お母さんのその顔を見ると、なんだか切なくなつて、ぶわっと涙が溢れた。

膝から、崩れ落ちた。

「ほんと、なの・・・おかー・・・さ、ほんとに・・・きこえ、ないの」

パジャマの袖で、ぐしゃぐしゃに掻きむしるように涙を拭く。

ちゃんと、発音できているのかはわからない。

けど、信じてもらわなきゃ、困る。

まだ、笑っているのかもしれないお母さんの顔を見るのが怖くて、ぎゅっと瞑った目をごしごしと袖で擦る。

両肩を強く掴まれた。

驚いて顔を上げると、顔を真っ赤にして私の肩をがくがくと揺するお母さん。

怒っているような、困っているような顔で、私の目を真っ直ぐ見つめて叫ぶように何かを言っている。

少し、怖かった。

必死の剣幕のお母さんも、それが聞えない自分も。

震えた手で、床に落ちたペンを掴む。

お母さんの手の中の紙をひったくるように取り上げて、裏向けにしてペンと一緒に渡す。

少しの静寂の後、お母さんはがっくりと肩を落としてその場にへたり込んだ。

私は差し出した紙とペンを下げることも無く、ただ呆然としていた。

3..切り離された世界

しばらくして、お母さんが紙を受け取って一言だけ走り書きした。

『病院に連れて行くから、したくしなさい』

一度だけ、私が頷いたのを見るとお母さんは部屋から出て行った。部屋のドアが、力任せに勢いよく、しかし無音で閉じられた。

私は、慌てて立ち上がった。

病院、病院に早く、行きたい。

今の理解不能な状況を、誰かに説明してもらいたかった。

パジャマを脱ぎ散らかして、適当な服をタンスから引っ張り出す。布の擦れる音はしない。

上着を羽織って、昨日のままの鞆を持つ。

玄関では、お母さんがブーツを履いていた。

私は少し汚れたスニーカーを慌てて履いた。

お母さんの背中を追う。

アパートの鉄の扉が閉まる音も、鍵が掛かる音もしない。

普段、気をつけて聞いたことは無かったけど、意外と自分の世界から消えると妙な感覚に陥る。

外に出ても、冷たい風が頬を撫でる感覚と澄んだ朝の匂いしかなかった。

私の世界では鳥は鳴いてはいないし、車も、電車も、走ってはいない。

生きている世界から切り離された感覚が、外に出てより強くなった気がした。

小さな車に乗り込む。

扉を閉める重い音、エンジンをかける音。

全てを頭の中で再生してみる。
少し、怖くなってすぐに止めた。
お気に入りの音楽も、聴こえない。
ただ、CDの画面の秒数だけが無情に時間の経過を告げる。
残っている感覚だけでも、いつもは気にしない窓の外を眺めてみる。

電信柱、人、車、陸橋。

外は、何も変わらない光に照らされて、いつもと同じ景色だった。
女の子が二人、自転車に乗って信号待ちをしながら楽しそうに話している。

茶色い鞆を持ったスーツの男性が携帯電話を片手に忙しく歩いていく。

なんて、平凡。

大きなカラスが、どこから飛んできて電線に止まった。

『あなたは、もうこの世界にはいないんだね』

カラスと目が合った気がした。

一声鳴いたのか、大きく欠伸のように口を開けて電線から飛び立った。

ゆっくりと目を閉じて、縋るように車の窓にもたれ掛かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5780d/>

こいのうた

2010年10月9日11時11分発行